



ご仏前に報告しました」
病気であっても健康であつても、いつか命は終わる。それならば、いかに生きるか、なぜ生きたのかを考えるべきではないか。そして、その患者の「人生」を支えることが医者役目なのではないか。東京女子医科大学脳神経外科講師の林基弘医師は、そのことを一人の患者に気づかされた。

乳がんが脳に転移し、林医師が得意とするガンマナイフ（放射線をピンポイントに脳腫瘍に照射する治療）を受けにやってきた女性。当時、48歳だった。

「2〜3cmの脳腫瘍が10個もあり、神経を圧迫して幻覚が見えるほど症状は深刻でした。2度に分

林医師は、8000人以上のガンマナイフ治療を手掛けてきた

けて治療することになつたのですが、治療日を決めるとき、彼女から『週末は治療が入らないなら、仲間とハワイに行きたいんだけど、いいですか？』と訊かれたんです』
末期のがん患者とは思えない質問である。別の

治療はうまくいき、10個の腫瘍はすべて消えた。だが、2年後に再発。生命活動を維持する脳幹にまで腫瘍が見つかった。

「再発を彼女に告げると、『いちばん出てほしくないところに出ちゃったね』と笑うんです。治療は難しく、後遺症などのリスクもあると伝えても、『やるしかないでしょう』と。前向きな彼女に引つ張られて、とことん治療を重ねました」

その治療もうまくいったが、完治するわけではない。治っては再発し、また治療……それを繰り返

だから、今日も患者のために

医師が同行するというので許可を出すと、彼女は本当にハワイへ旅立った。「どんな状況でも、自分のやりたいことはやるんだという考えの方でした。それほど意思の強い人間に会つたのも初めてでしたので、驚きました」

返したが、5回目を数える頃には、がんは「星の数ほど」に増えていた。

「もうそろそろ、全脳照射も考えていこうか？」
林医師はそのとき、彼女に告げた。全脳照射は、ピンポイントにがんを照射するのではなく、脳全体に放射線を当てる方法だ。腫瘍の数が多いときはこの手法が取られる。だが、彼女はきっぱりと拒否した。

「それをする、生活に影響が出るかもしれないでしょう。自分で考えて生きることができなくなるのは嫌。だから、ガ

ンマナイフで先生がでける範囲で治療してほしい。先生、私の治療でギネスに挑戦してよ」

全脳照射をすると、正常な脳細胞もダメージを受ける恐れがあり、認知機能が低下するリスクが格段に高まる。彼女にとって、それは生きる意味を失うことと同義だった。

「彼女は乳がんに苦しむ人を支援する活動をしていました。彼女の一人息子も大学に入ったばかりだったので、子供や仕事のためにも最期まで自分のやりたいことをして生きたい、治療してボケるなんてまっぴら御免だとおっしゃっていた。私もその思いに応えたい、と粘りに粘りました」

全9回、トータルで140個の脳腫瘍をガンマナイフで照射した。だが、がんが増殖するスピードに追い付くことはできなかった。脚が麻痺し、脊髄への転移が見つかったから仕事は続けていた

が、最期はホスピスに入り、亡くなった。

「そうだ、林先生のところへ遊びに行かなきゃ」
そう言つて、息を引き取つたと後に家族から聞かされる。最期まで彼女は、自分の「やりたいこと」を持ち続けていた。

「彼女が弱音を吐いている姿は一度も見たことがありません。彼女は、自分が生きていることの意味がわかっていただんだと思います。生きていることは、自分のやりたいことができるといふことなんです。それなくしての治療は意味がない。彼女を見ていて、そう思うようになりました」

生きるために治療をするのではない。何をするために生きるのか。それが治療の目的になる。林医師は、患者に必ずそれを問いかけている。

一人の患者の生き様が、一人の名医を生み、そこから多くの患者が救われることがあるのだ。